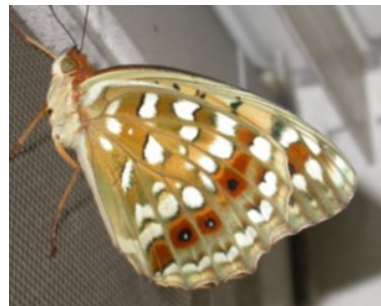


## オオウラギンヒョウモンの飼育法

作成：2005.9.05 仲西周二



### 全般

最近は累代飼育技術も確立されているようであるが、本資料では母蝶からの産卵から成虫までの飼育経験について述べる。羽化成虫の交配、産卵期までの長期間の母蝶の飼育について、経験のある方に記述を追加して完成させて戴きたい。

### 採卵

9, 10月に野外で採集した母蝶は既に産卵準備が出来ており、持ち帰って給餌し、産卵装置にセットすれば容易に産卵を始める。

産卵装置は6号の素焼き鉢に深さで半分程度赤玉土を入れ、その上にチュールを2~3枚重ねて置く。鉢の上部も同様のチュール1枚で覆った間の空間に母蝶を放す。上下のチュールの間隔が母蝶の背丈の1.5倍程度取れば十分である。赤玉土は鉢底から吸水させて鉢内が乾燥しないようにする。産卵装置とはこれだけであり、そこには食草のスマレが全く関与していない。初めて試みた時は、装置の中にスマレを入れたが、その後はスマレがなくとも産卵に影響が無いようでありそうしている。

母蝶は1000卵以上などと多数産卵の能力があるが、1月以上の長期間に渡って産卵を続けるので、この間の世話の仕方では採卵数に差が出る。

### 卵の管理、越冬

樹脂製ネットに産卵された卵は10月に、食草を植え込んで準備した植木鉢(以後越冬装置と呼ぶ)にセットする。鉢にはプラスチックの7

この段階の飼育上のポイントは、卵から冬の間には孵化して春先に食草に食いつく迄の幼虫の越冬成功率を高めることと、大型成虫(特に♀)を羽化させるの2点であり、他に格別の留意事項は無い。

友人は経験の結果、素焼き鉢に代えてプラスチック容器を使用しているが、母蝶の足や羽が擦り減らないので具合が良いと言う。給餌用の餌は、果物類や砂糖、蜂蜜、カルピスなどの希釈液(舐めてわずかに甘い程度)を使用する。あまり濃厚なものは卵詰まりを招くと言われるが経験は無い。産卵中は毎日1回は給餌する。チュールの使用は鳩山邦夫氏の著書「チョウを飼う日々」に記載されて一躍有名になった。メッシュが大きめで母蝶が産卵する際に、止まっている面の裏側(鉢の外側)に産卵器を網目から突き出して産卵するので、産卵数が一目で分かり、且つ母蝶の動きで卵が落とされる心配が無い点でも優れていると思う。チュールが無ければ台所用のプラスチック製の水切りネットでも良いが、以後の卵の管理の点から、腐ったりかびたりしないメッシュ状の合成樹脂製品を使うことを勧めたい。

号鉢を使用して新しい清浄な用土でスマレの夏越し苗(半分葉は枯れている)を植え込み、更にスマレの種を播種し薄く覆土した上をスス

木の枯葉で覆う。この鉢の表面の一部に杉皮でアーチを作り、その裏面に樹脂製ネットごとホッチキスで卵を止める。2~4cm幅の新しい杉皮の両端を直角に折り曲げて鉢土に挿し、杉皮の表面が表向きになるようにセットし、杉皮の下面はススキの枯葉との間に僅かな空間を持つアーチを形成させる。こうすることにより卵は杉皮により直射日光から守られ、地面に直接触れないがそこからの湿度が届く状態に置かれる。植木鉢ごと袋掛けて日当たりが良く雨が当たらないベランダなどに置く。以後の管理は食草を維持する程度に鉢底から吸水させるが、鉢の上からは水を撒かない。幼虫は乾燥に強く、過湿を嫌う。

本種の卵は年内に孵化し、孵化した幼虫は摂食せずに越冬し、春先食草の芽出しを待って摂食を開始するとされている。僅か数度の飼育経験だが、11月末に幼虫が孵化済みであったり、

### 越冬後の幼虫の飼育

春先幼虫は姿を見せないが、食痕は確実に増えて行く。この時期が過ぎるとやがて摂食中の幼虫や、ネットによじ登って日光浴をする幼虫の姿を確認できるようになる。



こうなれば飼育は他種と変わらないが、この時期の幼虫の大きさは個体ごとに大きくばらつく点には注意が要る。概して成長の速いものは♂、遅いのは♀と言う雌雄差を超えて成長程度はばらつくのであり、個体により覚醒する時期がずれるのが原因と思う。目に付く幼虫を全部回収した後も、遥かに遅れて小型の幼虫が残っ

1月初めでも孵化してなかったり様々で、どちらの場合も春先に元気な幼虫が見られたので、孵化時期はあまり気にしない。

東京地方では2月中旬にはスミレの種が発芽して双葉が開き、2月末には越冬株の新芽も伸びてくる。この新芽に食痕が見えることが幼虫の越冬成功の証である。成功率(卵に対して越冬に成功して春先に得られた幼虫の割合)は年にも、越冬装置のバッチによっても大きく変わり、30%を成功の目安にしている。それだけ技術がまだ未確立と言ってよい。

産卵後越冬装置にセットするまでの卵の管理がもう一つ重要と考えている。友人から郵送された卵の場合、丸くていかにも充実した外見のものは結果が良く、一部細く尖った形状や、ゆがんだ形状の卵が含まれる場合、概して結果は良くない。

ている可能性に注意して欲しい。

大型個体飼育のためにも、極力同じ大きさの幼虫同士を揃えて飼育するように注意している。成長の速い大型幼虫と同居するのは小型幼虫にはストレスが掛かると推察する以外にも、第1群か第2群の比較的成長の速い個体群の中から、期待の大型♀が誕生する確率が非常に高く、その識別にも有用だからである。



更に、蛹化時期には連れられ蛹化と称して、同居する幼虫が蛹化すると、本来まだ成長を続けるべき幼虫が影響を受けて蛹化を急ぐ結果、小

型の個体となる現象が起こる。これを避けるために、幼虫の大きさを揃えて飼育したい。餌の量を十分確保することも重要であり、6号鉢一杯の食草に対して2頭の終齢幼虫程度が好条件であろう。

### 蛹化

蛹化は袋掛したネットや支柱か、スマレの葉を乱雑に束ねて下垂する。かなりの頻度で蛹化時の落下事故が発生するので注意が要る。前蛹をよく注意すると、吐糸がほとんど無いものや少ないものが事前に分かる。大型の♀と期待して育ててきた個体などは、せめて落下時に軟着陸できるように前蛹の下部にゴースでU字型の受けを取り付けたりするのが精一杯の対策であろうか。落下直後であれば、尾端を持って回収し正しい姿勢で吊り下げれば正常な蛹が出来ることは実証済みである。折角苦労してここま

幼虫の外見からの雌雄の判別は、背中の筋が黄色味の強いものが♂、白っぽいのが♀、幼虫の動きがせかせか素早いのが♂などで判定している。概ね違わないと思うが、的中確立は調べたことが無い。

で飼育したのに、最後の段階での失敗はこたえる。



### 食草について

食草はスマレ（ヤマトスマレ）、白スマレなどの細葉の無茎種とパピリオスマレを使用しているが、どれでも幼虫は好食し生育に差は無い。正確に2年草かどうか知らないが、両種とも新苗2年目ぐらいが明らかに元気が良い。全て落葉性で冬に葉はなく、春に新芽が出る。この芽だしの時期はスマレの方が半月ほど早いので、越冬幼虫の食い付き用にはスマレを使用して

いる。食草として葉の量が多いのはパピリオスマレであるので、両種を適当に使い分けている。スマレは春から8月ごろまで何時播いても発芽し、翌年用の苗として育てられるが、パピリオスマレは採り播きもしくは年内播きで、発芽は翌春1度である。従ってパピリオスマレの更新・繁殖には、株元に多数出来る茎を取り分けて植え直すのが手っ取り早い。